

日本とスコットランド・ドイツとの欧米文明の 交渉事情に関する現地調査

—幕末期から明治初期にかけて—

Research Concerning Japan 's Acceptance of Western Civilizations of
Scotland and Germany — from the Edo Era to the Meiji Era —

関川悦雄*

Sekikawa Etsuo

From the last Edo Era to the early Meiji Era, the government of the Meiji Restoration has learned and accepted Western civilizations from Scotland and Germany. Therefore, I made a voyage to Scotland and Germany, and researched the technical and cultural exchanges between Japan and these two western countries. Thus, I am able to explain the process of Japan's acceptance of Western civilizations.

I はじめに

明治維新政府は近代国家の樹立に向けて、幕末期の欧米文明の受容の流れを継承し、その受容を本格的に急速に推進して行く。とりわけ、科学や工学・理学、医学、農学、その他の文化などの各分野で、これらの最新の知識や技術を欧米社会から導入することであった。これが「欧米社会をモデルとする『富国強兵』『文明開化』政策」(百二十年史p. 7)のことである。

この欧米文明の導入の際に重要なことは、欧米の知識や技術を受容する、いわばその受け皿に相当する精神的・知識的基盤が先立って一定程度出来上がっていなければならなかったことである。この基盤はすでに藩校や蘭学塾・英学塾などの教育により形成されていた。歴史的に見ると、薩摩藩の造士館¹⁾(2013年3月現地調査)、長州藩の明倫館(2015年3月現地調査)、土佐藩の致道館(2016年3月現地調査)、佐賀藩の弘道館(2018年3月現地調査)などの藩校教育や、長崎の鳴滝塾²⁾・グラバー邸(2017年3月現地調査)、適塾や慶応義塾などの西欧学問の塾の教育が、受容基盤の形成の役割を果たした。この基盤形成は「江戸時代後半から幕末期にかけて形作られてきた学校の近代化動向」(百二十年史p. 7)に沿うものであった。

加えて、幕末の代表的知識人である佐久間象山(1811~64)は、「東洋道徳・西洋芸術」という名言を吐いている。その「西洋芸術」とは科学技術などの欧米文明を指していて、その欧米

* 人間生活学科

文明を受容することが、西洋列強より迫りくる危機の下にあった日本の不可欠な態度であった。この態度が幕末期以降、欧米文明を積極的に摂取する路線と化して行く。

維新政府は欧米文明を継続的に摂取して行くが、その摂取に寄与した政策が海外留学生の派遣とお雇い外国人教師の招聘の二つである。維新政府は明治3年12月に「海外留学生規則」を定め、その時の留学生派遣先の目安として、工学系分野の留学生をイギリススコットランドへ、理学・医学系をドイツへ、法学系をフランスへ、農学系を米国へと明示した(百年史p.99)。

以下において、そのうちの工学系のスコットランドと医学系のドイツに絞って、この二ヶ国と日本との欧米文明の交渉事情について現地に赴いてフィールド調査し、それについて考察する。そして、本調査³⁾の最大の意義は、モデルとなる被受容国側の現地での詳細な事情と、受容国側の相手国との微妙な交渉事情を明らかにすることにある。なお、「交渉」の語は当事二ヶ国が接し、係り合いつつ、一方国が他方国より文明・文化などを受容することを広く意味する。

II スコットランド文明 — 工業・技術などの交渉事情

英国は1858年に日本との間で英日修好通商条約を結んだことにより、多くの英国貿易商人を幕末期に日本へ送り込むようになる。この場合、なぜスコットランド人が英国本国のイングランド人よりも数多く来日したのか、である。それは、「通信・海運・サービス産業など」を興し、発展させつつあったスコットランド人の方が、「郷里を進んで飛び出し、立身出世を夢見て、海外(日本)に定住の場所を求める」(鶴飼p.72)傾向をもっていたからだ。かれらはすでに倒幕気運の高まる西南諸藩との関係を深めていた。本調査はこうしたスコットランド人の傾向・行動を念頭に置き、日本とスコットランドとの関係を深めて行く初期事情を調べることである。

両国関係の始まりは、そもそもマセソン(Matheson)商会在当時横浜という新開港地で始めた交易にある。同商会はすでに討幕派の長州藩とも武器を扱う密貿易—最初は薩摩藩を通しての密貿易—の関係を持ち、1863年にいわゆる「長州5(ファイブ)」—伊藤俊輔(後の博文)・井上聞多(馨)・山尾庸三・野村弥吉(井上勝)・遠藤謹助—を横浜から密出国させ、ロンドン大学に留学させた(加藤p.1)。じじつ、当時マセソン商会在いたグラバー(Thomas Blake Glover, 1838~1911)がかれら日本人をそのように手引いている。そこで、グラバーというキーマンとなる人物について、スコットランドで現地調査に当たった。

1 「スコットランドのサムライ」グラバー（“The Scottish Samurai” Glover)の役割 —スコットランドと日本との架け橋—



写真1 トーマス・グラバーの生地

スコットランド (Scotland) の首都エディンバラ (Edinburgh) より北へ200kmほど行ったところに、まぎれもなくあの馴染みのあるグラバーという人物を産んだアバディーン (Aberdeen) の街がある。私は、その市郊外にある「トーマス・グラバーの生地」(‘THOMAS GLOVER PLACE’ 写真1) と記した立て札を探し当てた。生地へ行く手前のところに石造りの古い橋Bridge of Balgownie —アバディーンに移住した詩人バイロンも幼少の頃愛した橋—があり、そこを渡り、さらに約1km先を登ったところに彼の生地がある。グラバーの生地に石碑があるはずだったが、その確認はできず生家もなく、「立て札」のみがあった。

それは無理もないことであった。グラバーは16歳のときに、マセソン商会の、同じスコットランド出身の商人マッケンジー (Kenneth Ross Mackenzie, 1801~73) のいるロンドン市内に出て、さらに21歳のときにその商会の仕事で長崎に来ていた。両親もまた郊外の生地を離れて、アバディーン市内—生地と市内の距離は約4km—に移っていたからである。幼少時の遊び盛りのグラバーは、丘高いこの地にあって、ドン (Don) 川の河口越しに北海を臨み、当時も船がその海を行き交いするのを目の当たりにしており、それがしだいに極東のアジアを航海してみたいと何か夢を膨らませたことだろう。

グラバーの人物像については、「スコットランドのサムライ」(The Scottish Samurai、写真2) と絶賛するアバディーン市内の海洋博物館 (Maritime Museum) で調査した。ここでは、次のように紹介されている。1859年9月、グラバーは21歳のときマセソン商会のマッケンジーを補佐するためにはじめて長崎に来日し、1863年にいわゆる長州ヤング・ファイブをイギリス・ロンドン大学に招いた、と。かれら長州人は、翌年にロンドンから北へ約800kmにあるアバディーンの街を2

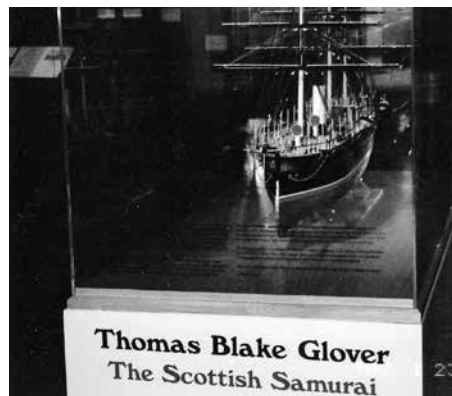


写真2 スコットランドのサムライ

回ほど訪ね、旅行した。かれらは当然のことながら、造船や他の工業などで活気に溢れるこの街を見聞し、その工業等の撰取意欲に燃えていた。そして、西隣のグラスゴーの街にも訪問した。後に、自らもマセソン商会の代理店として類似の商会を立ち上げたグラバーは、歴史上

「1865年に薩摩藩の19人も英国へ密航させている」(石附p. 168)。海洋博物館内の展示板には、「Gloverは1800年代後半の日本の工業国家としての発展に大きく寄与し、また三菱商会や日本政府の経済・商業上の助言者となった」とある。

2 スコットランドの工業・技術や経済の急進展(18～19世紀)—海外への展開

次に、18～19世紀のスコットランドの工業・技術や経済の進展はどうだっただろうか。

この進展の勢いについて、スコットランド国立博物館(National Museum of Scotland)の展示物や資料で明らかにして行こう。その進展の勢いは、1451年創設のグラスゴー大学の出身者ワット(James Watt, 1736～1819)が1769年、ニューコメン(Thomas Newcomen, 1664～1729)の蒸気機関を効率のよいものに改良したこと—往復運動から回転運動式の蒸気機関のこと—toに始まる。ワットは、いわば工業・技術のパイオニアと称され、当時の産業革命の進展に大きく寄与した一人である。

加えて、石炭(coal)のもつ高熱の火力が強い蒸気を起こすことを活用し、その蒸気の力が次から次へとエンジン、蒸気船、蒸気機関車(ディヴィソンD.S.Davisonによる1861年発明)、機織り機械、羊毛・綿織機械などを駆動する原動力となったのである。他に、その副産物として、リンドセイ(Lord Lindsay, 1748～1819)の天文望遠鏡(1806年)、ドリル機械・輪転印刷機械、照光灯台、鉄道技術、橋梁技術などが、次から次へと開発された。さらに、ステフェンソン(Robert Stephenson, 1775～1850)のロケットモデル(1829年)や灯台開発、ステヴェンソン(Thomas Stevenson, 1818～87)のライトハウスの建築、エルダー(John Elder, 1824～69)のエンジン開発(1854年)などがもたらされた。この人たちのほとんどが1495年創設のエディンバラ大学の出身者である。

19世紀半ば頃には、スコットランドの人たちはこれらの工業技術の成果を携えて、アメリカ、オーストラリア、アフリカ、最果ての東アジアなどへと活発に貿易・経済・商業活動を展開して行くことになる。幕末日本への接近はこうした経済・商業活動の一環である。

スコットランドは大英帝国の方針に従い、本国と、南半球にあるカリブ海諸国やアフリカ諸国との間で描かれる三角形による三国繁栄の形(Thriving)で、米国独立戦争後の同地域の貿易の主導権をすでに握っていた。じっさい、カリブ海諸国の現地で採集された葉タバコを自国に蒸気船で持ち帰り、それを自国工場で加工して、同じ船でタバコ製品を他国へ運び、売る商売を盛んに展開した。スコットランドの、最果ての極東アジア—中国や日本など—への展開も、綿花・生糸・茶などの原材料とその製造による加工貿易であった。

このように、当時のスコットランドは、グラスゴー(Glasgow)という港町を海外進出の最大の拠点にして、工業・技術の力による原材料の集荷とその加工を基盤にした貿易を行い、商業活動を活発化させていた。この活動に付随して、演劇、音楽、文学、ラグビー・フットボー

ルやサッカーなどの英国文化も、海外に伝播して行くのである (Kelvingrove Museum)。

3 日本のスコットランドへの急接近

(1) スコットランドへの日本人留学生

一方、幕末日本では、長州5—そのうち伊藤俊輔と井上聞多の2人は四国連合艦隊下関砲撃事件(1864年)で先に帰国する—や、薩摩19—五代才助(後の友厚、1836~85)ら4人が引率業務で他の15人が留学—の留学生たちはおもにロンドン大学で歴史や科学や数学などの学問を修めつつ、漸次スコットランドの造船・工業や技術などの実学に傾倒して行く。スコットランドの国勢に目を見張るものもあって、その後かれらに続く人たちが輩出する。

まず、長州5の一人である山尾庸三(1837~1917)は、ロンドン大学卒業後、北方のグラスゴーの造船所で働き、その傍らさらにアンダーソン・カレッジ(今のストラスクライド大学)の夜学で学び、帰国後工学省の中に置いた工学寮を工部大学校(東大工学部の前身)に1877年に改称する。かれは工学卿の歴任、日本土木史の父、日本近代工学の祖となる。もう一人の井上勝(1843~1910)はロンドン大学で鉄道や造幣の技術を学び、帰国後日本の鉄道の発展に貢献する。

山尾に続く志田林三郎(1856~92)は1880年、グラスゴー大学に物理・数学の専攻で留学し、工学大学校の一期生・最初の工学士であり、電気工学の先駆者となる。渡辺嘉一(1858~1932年)は1884年からグラスゴー大学で土木技術や土木工学を学び、鉄道技師となった。かれは現地に留まってフォース鉄道橋の建設に関り、その業績が認められて、スコットランドの現在の20ポンド紙幣の肖像画となっている。田中館愛橘(1856~1952)は1888年、グラスゴー大学に物理学専攻で留学し、日本物理学の父と称されるようになった。

(2) スコットランドからのお雇い外国人教師

次に、長州5の一人であり英国留学の経験のある伊藤博文(1841~1909)は、明治政府に出仕し、政府の工業化政策を先導する重要な役割を担うことになる。かれは明治4年11月出発の岩倉使節団の副使としても、翌5年8月に英国に赴いたときに、お雇い外国人の工学校教師の人選に関わる(加藤p. 1)。このときすでに、明治初期の工業化政策の担い手は工部省であり、その工部省はスコットランドの産業技術を受容することとなった。

伊藤は、スコットランドからの影響により、エンジニア・技師こそが社会発展のリーダーであると熟知していた。工業技術の受容・導入に当たっては、スコットランド人の現場技術者が四つの部類に区分された。一つは工場・造船所・製造会社に雇われる機械技師であり、二つ目は鉄道・橋梁・道路・上水道・下水道に関わる土木技師であり、三つ目は電信の架設に従事する電気技師であり、四つ目は造船会社に雇われる造船技師に大別されて、工業技術が各分野別

に積極的に摂取される(加藤p. 2)。明治政府の工業化政策には、こうした現場での工業技術の導入と高等教育における工業技術者の育成の二つがあった。

お雇い外国人教師の役割はおもに後者の工業技術者を育成することにあった。その一人がダイアー (Henry Dyer, 1848～1918) である。かれは山尾庸三とのグラスゴー大学における学友である。直接のきっかけは、伊藤博文がロンドンのマセソン商会に人選を依頼していたことであり、その依頼を受けたのが山尾の学友のダイアーであったわけだ。かれは1873(明治6)年に来日し、日本の工業技術教育の父と称され、工学寮初代教頭となる。

他に、ブラントン (Richard Henry Brunton, 1841～1901) がいる。かれはもと鉄道技師であるが、灯台技師としてもスコットランド流の灯台を日本に26基も設けた。そして、日本初の電信も架設した。次いで、バートン (William K. Burton, 1856～99) はエディンバラの生れで、水道技師として1887(明治20)年来日し、上下水道工事をリードし、衛生工学を広めた。

このように、明治初期の日本はグラスゴー大学へ多くの留学生を送った。山尾や渡辺らが現地において、日本からの留学生を迎え入れた。加えて、スコットランドのグラスゴーとエディンバラの両大学からお雇い英国人教師が数多く日本に招かれ、日本の工業技術の発展に寄与した。

Ⅲ スコットランドの文化・教育などの間接的影響関係

以上、日本とスコットランドとの工業・技術や経済活動などの交渉事情について考察してきた。次に、これら以外の分野として、スコットランドの文化・教育などの日本への間接的影響関係について見て行く。

1 吟遊詩人口バート・バーンズと「蛍の光」の由来

私は、「蛍の光」の原曲に当たるスコットランド民謡の作詞家ロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759～96) という人物を調査するために、スコットランド南方にあるエアー (Ayr) 市を訪れた。到着後、エアー駅からバスで市郊外にあるアロウェー (Alloway) 村に行き、吟遊詩人バーンズの小住宅 (The Burns Cottage) と生家博物館 (Birthplace Museum) を訪問し、その周辺も散策した。バーンズは自らじっさい農作業に取り組みながら、スコットランド地方の自然と方言・人情などをこよなく愛し、人々の喜怒哀楽を謡う詩人であった、と感得しえた。かれが農村の吟遊詩人としてスコットランド民謡に、“Auld Lang Syne” (「蛍の光」の原曲) という歌詞を付けたのである。

バーンズは、このThe Burns Cottageには7歳の時までしか過ごすことができなかった。この小さな生家には、麦わらを食する馬の小屋があり、この小住宅がかれのインスピレーションを鼓舞した家(写真3)である。他、ミルク・チーズ・バターをつくる牛小屋、大きなテブ

ルを囲む勉強部屋、そしてトーチカ・ベッド・台所などのある居間があって、生家全体は全部で4室しかない小さな家である。一家は生活が苦しく、バーズは7歳の時にこの村を離れ、両親と共に各地を転々として貧しいながらやがて農場を自立経営しようとするが、すべてうまく行かなかった。その間、恋人ジーン・アーマーとジャマイカ島への駆落ちに向けて、旅費を得るために処女作「スコットランド方言詩集」(Poems Chiefly in the Scottish Dialect;1786)を出版した(難波利夫編『ロバート・バーズ書誌』)。その駆落ちは失敗に終わる。

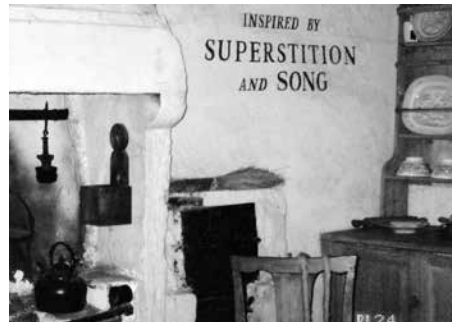


写真3 バーズの生家

ついに、過酷な農場経営をやめて、生家から約50km離れたダンフリース (Dumfries) で一家を養うべく、スコットランド歌謡詩集を本格的につくり、世に出した。それもわずか5年の短い期間に集中的に書いた。バーズの名前を高めたのは、この時期の詩作であった。また、物語詩として、“Tam O’ Shanter”も1788年頃に書かれた。この物語はその背景として、生家近くの古い石橋造りのBridge of Doonや、エアー市内に今も残っている居酒屋などを舞台にした作品であるが、バーズの故郷への思い入れはことのほか強かったようである。この作品は、牧場主タム (Tam) と愛馬メグの関係を中心に描かれ、そこへ魔女を登場させるストーリーである。しかし、かれの才能は余りにも37歳にしては、はかなく早死にし、埋もれた。

一方、Auld Lang Syneというスコットランド民謡に対する現地でのイメージは、日本におけるそれとはまったく異なるものであった。原曲はもともと郷土料理ハギスを口にし、酒を酌み交わしつつ、懐かしい仲間との再会を祝する歌⁴⁾である。これは当時米国にも伝わり、同様に新年の再会を祝うソングである。この米国から日本の音楽取調掛として雇われた外国人教師メイソン (Luther Whiting Mason, 1818~96) が、当時アメリカでも歌われていたスコットランド民謡を日本に持ち込んだのである。

メイソンはボストン在住時代に伊澤修二 (1851~1917) と知り合いとなった。帰国後音楽取調掛長となった伊澤によって、メイソンは日本に1880年に招かれ、日本における西洋音楽の指導と唱歌選定の仕事に当たった。そのとき、かれは、日本人がファとシを抜く音階—ヨナ抜き—でセンチメンタルに歌うことを知っていた。そこへ、音楽取調掛の国文漢文学者稲垣千穎 (1845~1913) が、奥州棚倉藩時代の幼少の頃に懐いた螢の飛ぶ原風景を基に1881年に歌詞を付けて、日本では「螢の光」という卒業・送別のソングとして歌われた。

他、日本の「故郷の空」(夕空はれて秋風吹き……という歌詞)の原曲も、バーズの「ライ麦畑で出逢ったら」⁵⁾というヨナ抜きのスコットランド民謡である。日本語歌詞は、国文学者大和田建樹 (1857~1910) がまじめに付けたものである。

2 ロバート・オウエンの「性格形成」の原理—明治政府の教育の方向性

他日、私は鉄道でグラスゴーから南へ約60km下ってラナーク (Lanark) 駅に向かった。そこから徒歩25分の約2kmのところ、山あいの谷間にあるニューラナーク (New Lanark) 村を訪ねた。この村がまさしくロバート・オウエン (Robert Owen, 1771~1858) の築いた最初の新しい労働共同体のユートピア地である。模範的な共同体は、‘A Socialist Labour Exchange’ とか ‘A New View of Society’ と称される。特徴的なことは、1817年に世界最初の労働者子弟のための自由幼児学校 (free infant school) を村の中につくったことである。村の中での生活を支える店 (village store) もあった。



写真4 谷川の水と建物

もともとは、1785年にデール (David Dale) が、10いくつもの大きな建物を築造し、そこにニューラナーク村をつくり、谷間の水で動かすタービン (写真4) の紡績機械による糸の生産を始めた。1800~25年にわたって、デールの娘婿であるオウエンがその村を引き継ぎ、蒸気エンジンによる糸の生産を行う模範的な労働共同体といわれるものに変えた。そのとき、幼い子どもらに労働を禁止し (青少年は別)、同紡績所内に「性格形成 (formation of charakter) のための教育機関」を設け、世界最初の幼児学校と夜間学校をつくった。当時、村を構成する共同体の人口が最大2,500人にも達した。

作業は大規模に蒸気エンジンによるロープで動かす機械でもって糸巻きを大量に同時に生産することであった。原料は綿花・羊毛・蚕糸などがあって、蒸気紡績機械による糸の生産量はスコットランド地方では第1位を誇ったほどである。綿花や羊毛などの原材料の加工処理は糸の生産過程においてはきわめて労働者の身体的健康に悪く、これをどう見るかである。

ここで問題にせざるを得ないのは、幼児学校の教育がなぜ子どもの「性格形成」に向かわせたのか、ということである。事業経営の採算を無視してまで、子どもたちに慈善事業的に教育を行うことはあり得るのだろうか。子どもの従順な「性格」を形成する狙いは、やはり別の意図があったと考えてよいだろう。当時、19世紀前半の英国社会は大量の労働者の子弟たちがいて、かれらの集団規律や社会規律の乱れに神経を尖らしていたのである。同時期の英国のベル・ランカスター法でも、読み書き計算の他に宗教教義の内容を安く大量に教授しなければならなかったのは、それと同じ事情である。

オウエンも子どもの教育に気を使っていた。通常読み書き計算や音楽・芸術活動の他に、社会の規律や秩序を形成し、それを維持する方法として、「戸外の行進、ダンス、合唱、軍事教練」を、谷間の狭い村に住む邪悪な子どもたちに課していた。この方法によって、やがて

個々の青少年労働者には工場集団内で秩序正しい作業や注意力・規律の伴う労働が期待できて、「模範工場内の合理的な生産の組織」(斎藤p.196)を可能にした。なぜなら、19世紀後半のどの近代国家も公費で教育を施すようになるのは、良質な労働者を育成し、良好な社会秩序・ナショナリズムを形成したいという思惑があったからである。明治政府の初等教育—たとえば兵式体操や儒教道徳の奨励など—での国家的狙いもその例外ではなかった。

Ⅳ ドイツ文明の交渉事情 —シーボルトによるドイツ医学受容の始まり

日独の関係で、1862年に幕府の竹内使節団一行36人がドイツとの修好条約の実施延期の手続きのためプロイセンへ渡独したという史実がある。これが近代における日独最初の交渉事情とされている(日独交流史編集委員会pp.31~34)。竹内使節団は、たしかに同年7月21日にベルリンで国王ウイヘルム(Friedrich Wilhelm) I世に公式に謁見している。

当時のプロイセンは、英国をモデルにして技術・産業を育て急成長を遂げ、1871年にはビスマルク(Otto von Bismarck,1815~98)によるドイツ帝国の統一を果たし、国の勢いを増していた頃である(Historisches Museum)。同行の酒井忠行・堀利熙の外国奉行によるオイレンブルク王への老中書簡(1860年9月18日付)の存在について、ベルリン国立図書館(Staatsbibliothek zu Berlin)で確認できた。これは竹内使節団一行のプロイセン渡独のための文書である。なお、後述の、日本から追放されたシーボルトは、1862年にドイツのWürzburgからパリに駆けつけて武内使節団一行を親日的に迎えている。

しかし、私はこの竹内使節団一行の訪独をドイツとの最初の交渉事情としては採用しない。むしろ、これより早く1823年来日した先のシーボルトの医療活動を最初の事例として採用したい。そのために、私はメイン川上流にドイツのヴェルツブルク(Würzburg)の街を尋ねた。この街で、シーボルト(Philip Franz von Siebold,1796~1866)は1796年に生まれた。ヴェルツブルク大学の医学部を卒業し、医学の他に植物学・動物学・民俗学も学んだ。卒業後、1822年オランダ政府に東方研究を願い出た。当時、シーボルトはメイン川を船で下り、その川との合流地マインツを経て、さらにライン川を下り、オランダのロッテルダムへ出た。翌1823年、オランダ政府の正式な命令により、オランダの植民地バタヴィア(現在のインドネシア)にまず着任し、さらにオランダ商館長ドウ・スチュルレル大佐に従って、同陸軍病院外科少佐として長崎の出島に到着した。オランダ政府の商業政策上、シーボルトは医者としての立場で日本の国土・人民・風俗・習慣・地理・動植物などを調査することも命じられていた。

こうした日本でのシーボルトの医者・調査活動が展示品の形で残されている博物館が、ヴェルツブルクのシーボルト記念館である。シーボルトの銅像もヴェルツブルク大学の隣にいかつい顔の形相をして、遠くへ—おそらく日本へ—向かって見つめ立っている。私がかつとも興

味・関心をひいたのは、シーボルトが1824年、許可を得て長崎の出島から上陸して奥地に入り、そこに鳴滝塾を開塾し、それが認められて、しだいに多くの弟子たちを抱え、じっさいに自分が外科手術を行いつつ、その手術にかれらを立ち会わせていたのである。かれは手術に関する講義を行うのではなく、臨床の立場で弟子たちに外科手術のしかたをしっかりと教え込んだのである。これが実地のドイツ医学の良さである。当時、ドイツ医学は、蘭医学が手術指導をやっていないという理由で、蘭医学よりもはるかに進んでいたと言える。

維新政府もじつは蘭医学よりもドイツ医学に優位性を見出し、それを取り入れて行く契機をシーボルトの弟子たちに見出していた。したがって、私はシーボルトの鳴滝塾における外科手術の医療行為に、ドイツの医学・教育に関する交渉の嚆矢と見なしてもよいだろう。じじつ、かれの外科手術を学んだ弟子たち—湊長安・美馬順三・高良斎・岡研介・二宮敬作・吉雄幸載ら塾生たち（鳴滝塾展示資料）—がその後の日本の医学発展の礎を築いている。

明治政府にあっては、1871（明治4）年の岩倉使節団がビスマルクによる統一となったプロイセンに訪れ、木戸孝允・大久保利通・伊藤博文らはこの国に興味をもち、医学の他に憲法や行政・政治のしくみや軍勢力も徐々に学ぶようになり、それらを積極的に取り入れて行く。青木周造も外交官⁶⁾としてプロイセン・ドイツと交渉して行くようになる。

V まとめ

幕末期、薩摩藩は1863年7月、英国に生麦事件の報復で薩英戦争を仕掛けられ、格段の軍事力をつきつけられた。一方、長州藩はそれより直前の同年5月に「勅命の攘夷」を実行する形で、馬関海峡を通過する外国船に砲撃を加えた。そして、翌1864年8月にその仕返しということで、外国船の四ヶ国連合艦隊下関砲撃でもって逆襲・占領され、その想像以上の威力を見せつけられた。両藩とも、相手国の圧倒的な軍事力に直面しそれに打ちのめされ、攘夷の困難さを悟って、むしろ相手国の軍事力・技術などの優位性を認め、ここはいったん開国してそれらを積極的に導入する方向へと政策転換を図ったのである。

その結果、両藩とも「長州5」—正確には四ヶ国連合艦隊下関砲撃事件の前に密航—や「薩摩19」と称して、かれらを海外とくに英国に密出国し、留学させて、英国の軍事力の基盤にある造船・科学・技術・工学などの実学の導入に努めた。留学先としては、紳士としての教養を主とする虚学重視のイングランドよりも、当時の英国を代表する実学重視のスコットランドの方に向いていた。したがって、本稿Ⅱでの現地調査の報告の通りスコットランド独自の造船・工学・技術・文化などの往古の隆盛ぶりがグラスゴーやエディンバラの街にて肌で感じとられた。当時の訪れた人らこそ鎖国日本の現状に鑑みて、それらの摂取意欲に燃えていたのである。

一方、ドイツ文明の交渉は本稿Ⅳの報告通りシーボルトの鳴滝塾での外科手術の指導に始

まったと確証できる。鳴滝塾は表向き蘭学塾であるが、実質的にはドイツ医学という微妙な位置にある臨床医学塾として開塾した。シーボルト自身はドイツ生れであり、正真正銘のドイツ医学を修得していた。かれの鳴滝塾の下で学んだ日本人医者—佐賀の伊東玄朴、山口の青木周弼、徳島の高良斉、愛媛の二宮敬作ら—が後に全国各地で活躍して行くのである。こうしてドイツ医学の根付く基盤ができていて、その基盤の上に明治日本の医学が発展する。スコットランドやドイツの音楽などの文化の領域も、工学・技術や医療技術などの実学が導入される余波として、日本の実状に即して伝えられたのである。

註

- 1) たとえば、造士館では「薩摩19」の一人である森有礼(1847~89)は英国に行く前にすでに英学を上野景範の門下で学び、林子平の『海国兵談』を読んでいて、洋学の必要性を痛切に感じ、洋学を受容する用意ができていた。
- 2) 鳴滝塾ではシーボルトは長崎の出島で本務をこなす傍ら、内陸の中腹地にある同塾まで出張して医学の講義と診療を行い、外科手術や種痘の臨床医学を重視した。かれの功績は臨床医学の下で多くの日本人門下生を輩出したことと、表向きは蘭医学であるが実質的にはドイツ医学であって、それが日本近代医学の濫觴となったことである。
- 3) 本調査は前任校の海外派遣研究員の研究費により、2016年8月16日から9月8日までスコットランドとドイツの現地に行き進められた。前任校の日本大学文理学部に謝意を表す。
- 4) Auld Lang Syneという英語はold lang sinceの古語である。Should auld acquaintance be forgot. And auld lang syne! (旧友の忘れられるべきでないこと。往事を偲ぼう! (友情の杯を交そうよ))。これがバーンズの原曲のイメージである。外国人教師ダイアーは山尾と別れる際に、再会を期してこの原曲を歌っている。なお、難波利夫は日本大学文理学部教授だった人であり、筆者は難波教授に古語詩の手解きを受けた。
- 5) 原曲の題名は“Comin Thro the Rye”となり、歌詞は「ライ麦畑の茂みの中で男と女が出逢ったら……」とある。かつて流行したドリフターズの歌詞は「誰かさんと 誰かさんが 麦畑 チュッチュッチュッチュッしている いいじゃないか 僕には恋人ないけれど いつかは 誰かさんと 麦畑」(作詞・なかにし礼)とあり、この歌詞が原曲の歌詞に近い。
- 6) 外交官と言えば、シーボルトの長子であるアレクサンダー (Alexander G.G. von Siebold, 1846~1911) も外交官になり、明治3年に来日して日本の外務省に出仕した。

引用参考文献・資料

- 1 石附実『教育における比較と旅』東信堂、2005年。
- 2 鶴飼政志『明治維新の国際舞台』有志舎、2014年。
- 3 加藤諒士「日本・スコットランド教育文化交流の諸相—明治日本とグラスゴウ」名古屋大学大学院教育発達科学研究科『紀要(教育科学)』第56巻第2号2009年、pp. 1~24。
- 4 齋藤新治「解説」『性格形成論(オーエン)』(世界教育学選集78) 明治図書、1974年。
- 5 難波利夫編『日本におけるロバート・バーンズ書誌』(ベルリン国立図書館)、1977年。

- 6 日独交流史編集委員会編『日独交流150年の軌跡』雄松堂書店、2013年。
- 7 文部省『学制百年史』帝国地方行政学会、1972年。
- 8 文部省『学制百二十年史』ぎょうせい、1992年。
- 9 現地の資料館・博物館訪問
 - i Edinburgh City : National Museum Scotland ; Museum of Childhood
 - ii Glasgow City : Kelvingrove Art Gallery & Museum ; Scotland Street School Museum
 - iii Newlanark City : Robert Owen's House ; Robert Owen's School
 - iv Ayr City : Robert Burns Birthplace Museum ; Burns Cottage ; Burns Monument & Garden ; Burns House Museum in East - Ayrshire
 - v Deutschland : Siebold Museum in Würzburg ; München Museum
 - vi Potsdam Deutsch Nationale Bibliothek
- 10 長崎市「シーボルトの生涯」
<http://www.city.nagasaki.lg.jp/kanko/820000/828000/p009222.html> (2015/09/04)
- 11 New Lanark World Heritage Site - Location
<http://www.newlanark.org/japanese/location.shtml> (2016/08/13)